

略本系「俊頼髓脳」の研究（一）

— 関西大学図書館蔵「俊秘抄」翻刻 —

俊頼髓脳研究会

《はじめに》

俊頼髓脳研究会では、これまで「俊頼髓脳」の伝本の翻刻影印の刊行につとめてきた。「顕昭本俊頼髓脳」（一九九六年三月刊私家版）は京都大学附属図書館蔵「無名抄俊頼」の、「唯独自見抄」（一九九七年二月刊私家版）は島原図書館蔵「松平文庫蔵「唯独自見抄」の翻刻であり、「国会図書館蔵俊頼髓脳」（和泉書院影印叢刊九二）はその影印である。この度、引き続き、ご許可を得て関西大学図書館蔵「俊秘抄」を底本としてその翻刻を行うものである。所謂略本系に属する当該本は、明暦二年校合の奥書をもち、同系統における善本である。詳しくは続編の解説で述べることとし、以下底本の書誌などを記し、乾坤二冊のうち（一）には乾巻（「俊秘抄上」）を翻刻する。

《書誌ならびに凡例》

I 関西大学本「俊秘抄」底本書誌

○所蔵 関西大学図書館「岩崎美隆文庫」。

○請求番号 911.2041/M1/1-1/2

○帙題「俊頼秘抄」（L12/911.2041/M1/1-1/2）

○装丁など 袋綴写本乾坤二巻二冊。楮紙、大本。岩崎美隆校合本
以下、各冊について記す。

《乾巻》

○外題 表紙左肩に墨直書。「俊頼秘抄 乾」

○内題 「俊秘抄 上」

○請求番号 911.2041/M1/1-1

○大きさ 縦二七・三糎×一九・三糎。

○表紙 蘇比色地渋引文様に、表右下から裏左下にかけて梅古木を手書。裏には更に飛鳥を描く。

○紙数 遊紙前後各一丁。墨付九七丁。

○行数 一面一〇行書。

○奥書 朱書にて「天保九年戊正月元日以一本校合了 岩崎美隆」。また左下に朱書「方則」とあり。

○印記 「関西大学図書館蔵書」角朱印の他に、表遊紙に「岩崎美隆文庫」長方朱印あり。

《坤巻》

○外題 表紙左肩に墨直書。「俊頼秘抄 坤」。

○内題 「俊秘抄 下」

○請求番号 911.2041/M1/1-2

○大きさ 縦二七・一糎×一九・五糎。

○表紙 蘇比色地渋引文様に、表には右下に山寺遠景図、裏には左下に川に草花を手書する。

○紙数 遊紙前一丁、墨付一〇七丁。

○行数 一面一〇行書。

○奥書 一〇六丁表に朱にて「天保九年戊戌正月二日以一本校合了 岩崎美隆」とあり。また一〇七丁裏に本奥書「明暦二年八月中旬以類本令校合了」が墨書され、左下に「方則」と朱書あり。

○印記 「関西大学図書館蔵書」角朱印の他に、表遊紙に「岩崎美隆文庫」長方朱印あり。

〔参考〕

乾坤とも、見返しに「請求番号」、「関西大学図書館蔵書」朱角印、整理日付・番号印を押す。末尾にも朱角印あり。整理印によれば昭和三十三年十月十二日付で関西大学に整理収蔵されている。乾坤とも別筆による写し。

関大本は坤巻末尾奥書より「明暦二年」に校合した旨の奥書がみえる。そのため、それ以前書写の本文（あるいはその写し）に、天保九年に、別本との校合を岩崎美隆が朱書したものと想定しうる。とすれば墨書による校合と朱書校合は区別すべきであろう。

岩崎美隆文庫蔵書については「関西大学所蔵岩崎美隆文庫・五弓雪窓文庫目録」（関西大学図書館シリーズ第十五輯 昭和五十一年三月二十日発行）がある。

◇翻刻許可 関大図関第一四号（平成十二年七月二十八日付）

II 岩崎美隆（いわさきよしただ）について

通称清平、藤門（ふじのかど）、杠園（ゆするはその）と号す。河内国花園（現東大阪市花園）の人、村田春門（はるかど）門。加納諸平や伴林光平とも交流があった。弘化四年七月十六日没す。享年四十四歳。著書に藤門雜記、杠園詠草、詞之山口などがある（関西大学図書館蔵）。枕草子研究史上、評価の高い枕草紙杠園抄は、春曙抄に書き入られた美隆の見解を折口信夫によって纏め、公刊された際に名付けられたもの。昭和五年刊「国文学註釈叢書」第十七巻所収「杠

園抄解説」(折口信夫講)は、美隆の人となり伝えてやまない。

III 翻刻凡例

本文は、漢字・仮名の別、送りがな、仮名遣いなども、全て底本の表記のままとした。

異体・通俗の漢字は、原則として底本に従うことにしたが、一部通行の字体にあらためたところがある。

見セ消チおよび補入については修訂後の形とした。

底本において和歌の引用は、二字上げの形で記されているが、紙面の都合上、翻刻では二字下げにしている。

※傍記については次のように扱った。

① 字体明記で記されたものは本文と同じ場合、記載しなかった。

② 割書は \wedge / \vee に括った。

③ 異本校合による補入の場合、位置を「○」で示した。

④ 原典では、異本にない場合、「イナシ」「以下ナシ」等の記載のうえで、範囲を示していたが、翻刻に際し、「」に括ることでそれを示した。

⑤ ほとんどが朱書による加筆であるため、本来は区別して明示すべき墨・朱の区別はあえて示さなかった。続編の解説にてそのことを触れることにする。

⑥ 翻刻本文106頁、108頁、109頁に示したカタカナ傍記については*印を付して位置を示し本文中の適所に四段下げにして挿入してある。

⑦ なお、数カ所見られる頭注についても解説で指摘する。

俊秘抄 上

やまとみことの哥はわかあき津しまの國のたはふれあそひなれは神の世よりはしまりて「けふ」いまにたゆることな
 しおほやまとのくにゝむまれ^{ライ}なん人は男にても女にてもたかきもいやしきもこのみならふへけれともなさけある人は
 すゝみなさけなきものはすゝまさることかたとへは水にすむいをのひれをうしなひそらをかける鳥のつはさのおひさ
 らんかことしおほよそ歌のおこり古今^{のイ}○序和歌式にみえたり代もあかり人のこゝろもたくみなりし時春夏秋冬につけ
 て花をもてあそひ時鳥をまち紅葉をおしみ雪をおもしろしと思ひ君をいはひわか身をうれへ別をおしみたひをあはれ
 ひいもせの中をこひことにのそみておもひをのふるにつけてもよみのこしたるふしもなくつゝけも^{マイ}ふせる^{けイ}ことはもみ
 えすいかにしてかはすゑの世の人のめつらしきさまにもとりなすへきよくしれるなくよくしらするもなしよく^{クイ}よめる
 もなくよくよまさるもなしよまれぬをもよみか^ほをにおもひしらするをもしりかほにいふなるへしそもくうたにあま
 たのすかたをわかちやつ^{のイ}のやまひをしるしこゝのつ^{のイ}のしなをあらはしていとけなきものををしへをろかなる心をさと
 くしむるもの^{このイ}ありしかはあれとならひつたへされはさとることかたくうかへまな^{ひイ}はされはおほゆる事すくなしむもれ
 木のむもれて人にしられさるふしとをたつねたきのなかれになかれてすきぬることの葉をあつめてみればはまのまさ

こよりもおほくあめのあしよりもしけし霞をへたて、春の山邊にむかひきりにむせひてあきの野へのそめるかこと
きなりやまかつのいやしきことはなれとたつねされはあしたの露ときえうせぬ玉のうてなれたへなるみことなれと聞
しらされは風のまへのちりとなりぬるにやあはれなるかなやこのみちの目のまへにうせぬることをとしよりひとりこ
のことをいとなみていたつらにとし月を、くれともわか君もすさめたまはすよの人またあはれむことなしあけくれは
身のうれへをなけきおきふしは人のつらさをうらむかくれてはおとこ山にましませるやつはたのおほんいつくしみを
まちあらはれてはみかさのもりにさかへたまへるふちのうらはにたのみをかくめくみ給へあはれひたまへかくれたる
信あれはあらはれたる感あるものをや

歌のすかたやまひをさるへきことあまたの髓脳に見えたれともき、とをく心かすかにしてつたへきかさらん人はさと
るへからされはまちかきものかきりをこまかにしるしまうすへし

はしめには返哥返イのすかた

やくもたついつもやへかきつまこめにやへかきつくるそのやへかきを

これはすさのをのみこと、申す神の出雲国にくたりたまひてあまなつちあしなつちのかみのいつきむすめをとりても
ろともにすみたまはんとてみやつくりし給ふときによみたまへる哥也これなん句をと、のへ文字の数をさため給へる
哥のはしめなるやくも立といへるはしめの五文字はその所にやいろのくものたちわたりけるとそかきつたへたるこれ

はやくもたつなどはほかにほむへからすとそふるき人まうしける

しなてるやかた岡山のいひにうゑてふせるたひ人あはれおやなし

かへし

いかるかやとみのおかはのたえはこそわか大君のみなはわすれめ

是は文珠師利菩薩のうゑ人にかはりて聖徳太子に奉給ひける御返也河内大和國にいかるかと云所にとみのをかはといふ川

のほとりにうゑたる人のふしたるをみてあはれひ給ひければよめる飢人は文珠也聖徳太子は救世観音なればみな御心のうちにはしりかはさせ給ひてよませたまひけるにや神仏の御哥なれば反哥のためしにするしまうすなり

次に旋頭歌といふものありれいの卅一字の哥のなかにいま一句をくはへてよめるなり五文字の句七文字の句たゝ心にまかせたりくはふるところ又よみ人の心なりとはかきたれとはしめの五文字ふたつかさなれる哥は見えず

ますかゝみそこなるかけにむかひるてみる時にイはこそしらぬおきなにあふこゝちすれ

これはなかに七文字をくはへたるなり

かのおかに草かのおのこしかなかりそありつゝも君かきまさんみまくさにせん

是は中に五もしをくはへたるなり

うち渡すをちかた人にもまうすれ歌もそのそこにしろくさけるはなにのはなそも

これははてに七文字をそへたる也

さま／＼におほけれどさのみやはとてしるし申さす

次に混本哥といへるものありれいの卅一字の哥の中にいまひと句をよまさる也

あさかほのゆふかけまたす散やすき花の世そかし

是はすゑの七文字の句をよまさるなり

いはの上になさす松かえとのみこそたのむ心ある物を

これはなかの七文字の句の十文字あまりひと文字ありてはての七文字のなきなりこれもひとつの躰也

次折句の哥といへる物あり五文字あるものゝなを五いつ句のかみにすへてよめるなり小野小町か人のもとへことかりに

やる哥

ことのはもときはなるをはたのまんまちよしもイつはみよしかきだてイへてはちるやと

かへし

ことのははとこなつかしきはなおるとなへての人にしらすなよ君イ夢

是はことたまへといふ文字をくのかみにきたるなりかへしはことはなしと云文字を句のかみにきたる也

次沓冠折句のうたといへるものあり十文字あることはを句のかみしもにきてよめるなり

イあはせたきものすこしといへることをすへたる哥
あふさかもはてはゆきゝのせきもゐすたつねてとひこきなみイはかへさし

これは仁和のみかとのかた／＼にたてまつらせたまひたりけるにみな心もえす返しともをたてまつらせたまひたりけるにひろはたのみやす所と申ける人の○たきものたてまつらせたまひたりければこゝろあることにそおほしめしたり

けるとそかきつたへたる

をみなへしはなすゝきといへることをすへてよめる哥

をのゝはきみし秋にゝすなりそますへしたにまイれイあやなしるしけしきは

これはしものはなすゝきをはさかさまによむへきなりこれもひとつのすかた也

次廻文哥といへるものあり草花をよめる哥

むら草にくさのはな敷イはもしそなはらはなそしも花のさくにさくらん

これは撰論撰イの尼か哥也さかさまによめはすみのまのみすといへることの躰におなし哥によまるゝなり

次短哥といへるものありこれは五文字七文字とつゝけてわかいまほしき事のあるかきりはいくらともさためすいひつゝけてはてには七文字をれの哥の躰にふたつゝくる也

おきつなみ あれのみまさる みやのうちに

年へてすみし いせのあまも ふねなかしたる

こゝちして よらんかたなく かなしきに

涙のいろの くれなるは われらか中の

しくれにて あきのもみちと ひとくは

をのかちりく わかれなは たのむかたなく

なりはてゝ とまるものとは はなすゝき

君なき庭に むれたちて そらをまねかは

はつかりの 鳴わたりつゝ よそにこそみめ

是は伊勢か七條后宮にをくれたてまつりてよめる哥なりことはをかさりてそへよめるは^{れイ}このころの人はこれをまなふ
へし人丸か高市皇子によせたてまつれる哥

かけまくも かしこけれとも いはまくも

ゆゝしけれ共 あすかやま まかみかはらに

ひさかたの あまつみかたとを かしこくも

定めたまひて かみさふと いはかくれます

まきのたつ ふは山こえて かりふやま

とまりまして あめのした さかえんときに

われもともとも

これはことはもかさらすさしことによめるなり是そむかしのみしか哥のすかたなめる又万葉集のなかに十文字ある句をふたつそへたる哥

うくひすの かひこのなかの ほととぎす

ひとりむまれて しやかちゝにゝてなかす

しやかはゝに似てなかす うのはなの

さける野へより 飛かへり きなきとよまし

たちはなの はなをはちらし 日ねもすに

なげときゝよし まひはせん とをくなゆきそ

わかやとの はなたち花に すみわたれ鳥

これはよくしれる人もなし短歌短歌に十文字ある句を二句そへる也イ「の中」にも旋頭哥ありイといふものはある「なめり」「れいの短歌に十文字ある句の二句そへる也」

しらくもの たつたの山の たきのうへの

おくらの峯に ひらけたる さくらはなはのイ

やまたかみ かせしやまねは はるさめの

つきてしふれは いとすへの みたはエイおちすき

さりにけり しつえにのこる はなたにも

しはらくはかり なみたれそ くさまくら

たひゆく君か かへりくるまで

これは草まくらといへる五文字の句のそへる也

是を長哥といひ短哥といへることありこのころの人さたかにしれることなしたうけたまはりしは長歌といふはなかくくさりつゝけてよみなせるにつきて長歌とはいふ也ことはのみしかきかゆへにまたみしか哥とはいふ也ことはみしかしといふはれの卅一字の哥は花とも月とも題にしたかひてよむにそのものをいひはつる也ヘイたとへはあさか山影さへみゆる山の井のともとにいひつればあさくは人をなとなを水のことにかゝりたることはをいひなかななりこのみしか哥は哥の中にいふへき心をはすゑまでいひなかせともことはをかへつゝいはるゝにしたかひてわたりありてなりたとへはおきつなみあれのみまさるみやのうちにとおもひよりなはすゑまでそのうみにイのことは○つきていひはつへき也これはことはにひかされて涙の色のくれなるはといひて又花すすきにかゝりて空をまねかせてすゑにはつかりの鳴渡

りつゝといひはつれは哥ひとつかうちにあまたのものいひつくせるによりてみしか哥とはいふなりとそころの人申けるたゞしれいの歌にもあまたの物よめる哥ありあつさ弓をしてはるさめともいひてすゑにわかなのことをいひたることもきこゆればにやれいの哥をみしか哥とかける髓脳もみゆめるは詩に短哥行長哥行と云ものあれとその心かなはさるなり

次に誹諧哥といふ物ありこれよくしれる人なしたまた髓脳にもみえたる事なし古今にあるにつきてたつぬればされこと哥といふ也よくものいふ人のされたはふるゝかことし

むめの花みにこそきつれ鶯のひとくくといとひしもする

イ同

あきの野になまめきたてるをみなへしあらことくしはなもひととき

これらかやうなることはある哥はさもときこゆさもなき哥のうるはしきことはあるは人にしられぬ事にや宇治殿の四条大納言にとはせたまひけるにこれはたつねおはしますまじき事也公任あひとあひたりし先達ともに随分になつねはへりしにさたかに申す人なかりきしかればすなはち後撰拾遺抄集イにえらへることなしとそ申ければさらは無術ことなりといひてやみにきとそ帥大納言におほせられけるそれに通俊中納言の後拾遺といへる集をえらへるに誹諧哥をえらへりもしおしイ○はかりことにやこれによりて事ともををしはかるにはかくしきことやなからんとこそ申されしか次に連歌といふものありれいの哥のなからいふ也もとすゑ心にまかすへしそのなからかうちにいふへきことの心をいひはつる

也心のこりてつくる人にいひはてさするはわろしとすとへはなつのよをみしかきものといひヲキイそめしといひて人は物をやおもはさりけんとすゑにいはずるはわろしこのうたを連哥にせんときは夏夜をみしかきものとおもふかなとすへきなりさてそかなふへき

尼の作

さほかはのはみつをせきあけてうゑし田を

家持中納言

この
コフイ
るイ
かなわせいひはひとりなるへし

△万葉第八／有之▽これは万葉集の連歌也よもわろからしと思へと心のゝこりてすゑにつけあらはせるいかなることにか

しら露のおくにあまたの聲す也花の色々有としらなん
セイ

これは後撰の連哥也

ひとこゝろうしみつ今はたのましよ夢にみゆやとねそすきにける

これは拾遺抄の連哥也これふたつはあひかなへり古今には連歌なし

次に隠題といへるものありものゝなをよむにその物の名を哥のおもてにすへなからそのものといふ事をかくしてま

はせる也あらふねのみやしろといへる九文字をかくしてよしなきせりの哥によみなせる也

くきも葉もみなみとりなるふかせりはあらふねのみやしろくみゆらん

なとりのこほりと云七文字をかくせる哥

あたなりなとりのこほりにおりゐるは下よりとくることをしらぬか

これらはおもしろしまねふへきか

龍膽をたいにする哥

わかやとの^イはなふみ^{大字}／ちらす^んとりう^イたう^イのこ^イな^イければや^イ／こ^イに^イしも^イすむ^イ

桔梗を題にする哥

あきちかうのは成にけり白露のをける草葉も色かはりゆく

これは人の常にいふさまにはよみにくければまことにかけるもしを尋てその儘によめる也よのすゑにもさやうなる事

あらはその文字をたつねてよむへきなり

なしはらのむまやといふ事を題にする歌

君はかりおほゆる物はなしはらのむまや出こんたくひなきかな

とよめりなへてのことはにつかはいまやいてこんとよむへけれむまやといへることたる^カひたる^イさまにきこゆれと拾遺

抄に能宣か仲文にくるまのかもといふものをこはれてなしといひければ

かをさしてむまといひける人もあればかもをおしと思ふなるへし

とよみたりける哥のかへしに

なしといへはおしむかもと思ふらんしかやむまとそいふへかりける

とよめりこれらをみればいまといへることはをむまといふへしとそみゆるこれひかことにあらしされはかのなしは
らのうたもよきなめり

万葉集に相聞哥といふは恋の哥を云也挽哥といへるはかなしひの哥なり譬喩といひ問答といふは文字にあらはれぬ
哥の病をさることふるき髓腦にみえたるかことくならばその数あまたありそれらをさりてよまはおほろけの人のよみ
うへきにもあらずたよのすゑの人のたもちさるへきことのかきりをしるし申すへしふるき哥にもそれらの病をさり
てよめりとも見えすにイますもさるへしとみゆるは同心の病文字の病也同心の病と云は文字はかはりたれと心はへのお
なしきなり

山桜咲ぬるときはつねよりも嶺の白雲たちまさりけり

これは山と峯と也山のいたきをみねと「は」いへは病にもちひイる也

もかり船いまそなきさにきよすなる汀のたつこのゑきはくなり

これ又なきさとみきはとなりみきはをなきさと云は文字はかはりたれとおなし心の病とする也

みちよへてなるてふもゝのことしより花咲春にあひそしにける

これもとしとよとを病と亭主院哥合にさためられたり文字病と云は心はかはりたれと同文字あるを云なり

みやまには松の雪たに消なくにみやこは野へにイにわか同なつみけり

是はみやまとみやこと也みやまにはといふはしめの五文字のみや「まはまことのおく山と云」みやこは「のへに」と

云「みやは花のみやことは」下の句のはしめのみとなりイ「いへる」文字はこころはかはりたれと文字は同じきなりイ同けれと心はかはる也

今こんといひしはかりに長月の在明の月を待いてつる哉

この月れはイとつきと也長月のとよめる月は月なみの月也ありあけの月とよめるはそらに出る月をいへるかはれと同文字な

り

難波津に咲や此花冬こもり今は春へとさくやこの花

これふるき哥論議といふものにたかひに論じたることなれはいまはしめて申すへき事イ○にあらねと「も」なには津と云

は難波の言をいひこのはなと云は梅花をいふなりとはいへれと文字やまひはさりとやこのはなといひいまをはるへとさくやこのはなといへれは文字やまひはさりとそみゆれイころみえず

あさか山かけさへみゆる山の井の浅くは人を思ふ物かは

これ又文字の病也あさか山といふ初の五文字は所の名也「にこりて云へきなり」なかのあさくは人と云は心あさし

といふこと「は」なれば心かはるといへと文字のやまひはさりかたくそみゆるこれふたつは哥の父母としておさなき
人の手ならひはしむる哥なりとふるき古今イ同
ものイにイかけりこのちゝはゝの哥の病「の」あれはすゑの世の子孫の歌のやまひ「は」
あらんにとかならんかまたふるき哥のなかにざりとこころなき病ある哥もあまたみゆめれはいかなることにかあらんよ
むへからんものつゝきにたゝよむへきにやとそみゆる

み山にはあられふるらしと山なるまさきのかつら色付にけり

これみやまと山となり

さかさらん物とはなしに桜花おもかけにのみまたきたつらん

このさかさらんといへるらんとまたきたつらんといへるらんトイなり

あつき弓をして春雨けふりぬあすさへふらはわかになつみてん

このけふゝりぬとあすさへふらはといふなりこれらのはかるゝ所なきやまひなりこれらみな三代集にいれり是はたと
へは人のかたちすぐれたる中にひと所をくれたる所みゆれともくせともみえぬかことしこれらありとていとしもなか
らん哥のやまひさへあらんはひきところなくやあらん

天徳の歌合に山ふきを題にする哥に

ひとへつゝヤやへ山吹はひらけなんほとへて匂ふ花とたのまむ

とよめりこれをやへ山ふきの本意にはあらずさらはひとへ山ふきとこそいはめとさためられたりけるけにさもと聞ゆ
もとのすゑの文字とすゑのはての文字と同是は哥にとかとする事也とさためられたりこれにつゐてよむましきかとお
もへは同哥合のさくらの哥に

足曳の山かくれなる桜花ちりのこれりと風にしらすな

とよめりはなとすなとこのなととはおなしこれをはあしともさためられす是は物の名とたゝのことはとはゆるす
な^{なりイ}
こころかさくら花と云は物の名也しらすなとは詞なれば也^イ

わか恋はむなしき空にみちぬらしおもひやれとも行かたもなし

このらしとなしとおなしけれともとある哥ともさためられすかやうの程のことは哥によるなめりまたおなし哥合に

ことならば雲ゐの月となりなゝむこひしきかけや空にみゆると

とよめりこれはもとののはしめのご文字とすゑのはしめのご文字とおなしいかゝ有へきとさためられたり是又古き哥に
なきにあらず

こひしきはおなし心にあらずともこよひの月を君みさらめや

とよめり恋しきと云ことこよひの月と云ことなり

あき風に△こゑをほに／あけて▽くるふねは△あまのとわたる／かりにそ有ける▽

とよめりあきとあまとなり是寛平哥合にとかときためられす

又はしめの五文字の初字と次の七文字の初字とおなしきは髓脳に岸樹のやまひといへりこれはさるへきこと也同文字
よみつればさゝえてみゝとまりてきこゆされとまたふるき哥になぎにあらす

しら露もしくれもいたくもる山は下葉のこらす紅葉しにけり

秋の夜のおくるもしらす鳴虫はわかこと物やわひしかるらん

又初五文字のはての文字となかの五文字のはてのもしとおなしきはみゝとまりてあしくきこゆとかきたれとふる哥に
みなよみ「^{て見ゆイ}のこしたることなし」

やま風にとくる氷のひまことにうち出る波や春のはつ花

山かせにと云に文字とひまことといふに文字となり

古郷はよしのゝ山のちかければひと日もみゆきふらぬ日^{そきイ}はなし

ふるさととは云は文字とちかければといふは文字と也これともにあしくもきこえずかうほどのことはうたによるへき
なめり病さる事大略如是哥は卅一字あるを卅三四字あらはあしくきこゆへけれとよくつゝけつればとかともきこえず

ほのくくと在明の月の月影にもみち吹おろす山おろしのかせ

しぬる命^{んイ}いきもやするところに玉のをはかりあはんといはなん

さきの哥は卅四字次哥は卅三字あるなり

又はしめの五文字の七文字ある哥

いてあかこまはやくゆきませまつちやままつらんいもをはやくきてみん

これらみなよき歌にもちゐられて人にしられたり文字のたらねはよしなき文字そへたる哥

はなの色をあかすみるとも鶯のねくらのえたにてななふれそも

このてなと、云な文字也

村鳥のたちにしわかな今さらにことなしふともしるしあらめや

このなしふともと云ふ文字也

おほよそ哥は神仏みかときさきよりはしめたてまつりてあやしの山かつにいたるまでその心あるものはみなよまさるものなし神佛の御哥はさきにするし申せりみかとの御哥はおほさゝきの天王のたかみくらにのほりてはるかに見やらせ給へる御製

たかきやにのほりてみれば烟たつ民のかまとはにきハイニケリ

これはみやこうつりのはしめたかみくらにのほりてたみのすみかを御らんしてよませたまへる哥也かまととは哥によむにいやしきことはなれとかくよみをかれぬればはゝかりなしみかとの御うたいまはしめて書いたすへきにあらず

延喜天曆の御集を御覽すへし

嵯峨の後の御哥にうへわたらせ給たりけるに

ことしけししははたてれよひのまにをけらん露はいくらはらはん

これ又さきのことしをのく集を御覽すへし哥は假名の物なればかゝれさらんことはのこはからんをはよむましけれ
と古き哥にあまたきこゆ

行基菩薩の哥に

靈山の釋迦の御前に契てし真如くちせずあひみつるかな

婆羅門僧正御返事

迦毘羅會にともに契しかひありて文殊のみかほあひ見つる哉

是は聖武天王と申ける「女帝の」みかとの東大寺をつくりて行基菩薩に供養せさせ給へと申させたまひければいま此
み寺の供養にあはんとて婆羅門僧正と申す人まいらるらん^{へし}その人に供養せさせたまへと申させ給ひければまたせ給ひ
けれともをそくみえたまひければいかにといふかりおほしてたちるまたせ給ひける程にその時になりておしきに^下花
香をそなへてうみにうけて人してみせさせたまひければおしきなみにつきてはるかにおきさまへゆきてみえずなりぬ^上
とはかりありておしきの花をさきにたてゝまいり給へりければよろこひおほしめしてとくとすゝめさせ給ひけるに婆

羅門僧正により申させ給ひける哥なり靈山と申すは釈迦如来の法華經とかせたまひける所也真如といへるはまことといへる事也此ふたりは同聞衆にておはしけるとそいひつたへたる

又高崗の親王の弘法大師にたてまつらせ給ける哥

ハカナクテイ
いふならく捺落の底に入ぬれば刹利も修陀もかはらさりけり

御返し

弘法大師

かくはかりたるまをしれる君なればたゞきやまでもいたるなりけり

もとの哥にならぐのそことよまれたるは地獄也せちりもといへるはみかときさきもと云也修陀もといへるはあやしきかたひもと云也地獄におちぬれはおなしやう也とよまれたる也かゝるよのことはりをよくしろしめしたる人なればかくめてたき身にてはおはします也とよまれたる也

傳教大師御哥

イあのくたらさみやくさほたいの
阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我立杣にみやうかあらせたまへ

これはひえの山をすゑの世まで有へきよしをよませ給へる也此人くこそは哥などをはさる物やあらんともしらておはすへけれとわか国の風俗なればみなよみつたへたまへるなり

住吉明神御哥

夜や寒き衣やうすきかたそきのゆきあひのまよりしもやをくらん

これはみやしろの年つもりてあはれにけれは^あみかとの御夢にみせたてまつらせ給ひける哥也かたそきと云は神のやしろの棟にたかくさし出たる木のなゝりすみよしのみやしろはふたつのやしほのさしあひてあれはそのふたつのみやしろのくちにたるよしをよませたまへるにやかたそきをかさゝきとかける本あるにや哥論義にあらそへるはかさゝきと云ては心もえす

みわの明神の御うた

恋しくはとふらひきませ千早振みわの山本杖たてるかと

これは三輪の明神のすみよしの明神にたてまつらせ給ける哥とそ云つたへたる

或本云みわの明神の住よしの明神にすてられてよみ給へる哥也^{とイ}云々

住吉のきしもせさらん^もとのゆへ^もにねたくや人にまつといはれん

これも住吉明神の御哥とこそは申つたへたり^{めれ}ひか^いことにや

伊勢か枇杷の大臣にわすられたてまつりておやの大和守繼蔭かもとへまかるとてよめる哥

三輪の山いかに待みんとしふとも尋る人もあらしとおもへは

是はかのみわの明神の御哥を思ひてよめる也

我やとのまつはしるしもなかりけり杵村ならば尋ねきなまし

すきをしるしにてみわの山を尋ぬとよむ也みなゆへあるへしむかしやまとの国におとこ女あひすみてとしころになりてけれとひるとまりてたかひにこと「の」なかりければとし比の中なれといたまたそのかたちをみる事なしとらみければ男うらむる所ことほり也但わかかたちをみてはおちおそれんかいかにと云ければ此なからひとしをかそふれはいくそはくそたとひそのかたちみにくしといふともねかはくはたゝみえ給へといへはさらはわれそのみくしけのなかにをらんひとりひらき^{てイ}み給へといひてかへりぬいつしかあけてみればちいさきくちなわわたかまりてみゆおとろきおもひてふたをおほひてのきぬその夜又きたりてわれをみておとろきおもへりまことにことほり也われも又きたらんこととはちなきにあらずといひちきりてなくくわかれさりぬ女うとましなからこひしからんことをなけきおもひてをのまきあつめたる○へそ^{をはい}といへりこのへそをはりにつけてかりきぬのしりにさしつ夜あけぬれはそのをゝしるへにてたつねゆきてみればみわの明神の御ほくら^{こイ}のうちにいれりそのをのこのりのみわけ残りたりければみわの山といふなり

伊勢太神宮祭主輔親によませたまへる哥

さかつきにさやけきかけのすみぬれはちりのおそり^{れイハイ}もあらしとをしれ

御和云

輔親

おほちゝちむまこすけちかみよまてにいたゝきまつるすへら御神

これは輔親祭主になりてはしめて御なをらひたまはりけるによろつにたへぬ身なれはおそりあるよしを申ければまへにさふらふ人につきて詫宣したまひけるとそまうしつたへたるなをらひとは伊勢國にて神のまへにてさけのみものくひなとするを申なり

和泉式部保昌にわすられてきふねにまいりてよめる哥

もの思へはさわの蛍も我身よりあくかれいっぴにける玉かとそ見る

明神の御返し

おく山にたきりて落る滝つせに玉ちるはかり物なおもひそ

これはみやしろのうちにごゑのきこえけるとそ式部まうしける

貫之か馬にのりていつみの国におはしますありとほしの明神の御まへをよるくらかりければ神のおまへともしらてとをりければ馬にはかにたふれていかにもおきあからすいかなる事にかとおとろき思てひ火のほかけにみれば神の鳥ゐのみえければいかなる神のおはしますそと尋ねければありとをしの明神と申てもものとかめせさせ給神なりもし乗なからや通りたまひつると人のとひければいかにも神おはしますらむともしらてすきはへりにけりいかにかい○すへきとやしろのねきをよひてとひければそのねきたゝならぬさまになりて汝われか前を馬にのりなからとをるすへからくはい○しはらされはゆるしつかはすへきなりしかあれと和哥の歌に道みちをきはめたるものなりそのみかせ○をちあらはしてすきはむま定て立事をえ

んか御神の詫言なりといへり貫之たちまちに水をあみてこの哥をよみて御殿のはしらにをしつけておかみ入てとはかりあるほとに馬おきて身ふるひしてたてりねきゆるしたふといひてさめにけり

あま雲の立かさなれる夜はなれはありとほしもいとおもふへきかは

實綱か伊よ守にてはへりけるに哥このむものにて能因法師をくして伊よにくたりてはへりけるにそのとし世中に日てりしていかにも雨ふらさりけりそのなかにも伊与国ことのほかにやけて國內に水たえてのみなとするたになかりければ水にうゑて死ぬるものあまた有けり守実綱なけき思ひていのりさはきけれといかにもしるしもみえさりければおもひわつらひて能因法師にかみは哥にめてたまふ物也三嶋明神に哥よみて参らせて雨いのれと申ければことにきよめいまいりていろくのみてくらにかき付てやしるに参りてふしおかみける程に○くにはかにもりふたかりて大雨ふりてたへかたきまてやます

あまのかはなはしろ水にせきくたせあまくたります神ならば神

そのうち三日許をやみもせずふりて後には四五日計に一度ふりて国のうち思さまにそ成にけるよのすゑなれと神は猶哥をは捨させ給はぬとそ實綱申けるこれはよしなしことなれと神の御哥のつゝきにさることありときこしめさんれうにかきて候也まして人のかたちしたらんものはこのみならふへきにやいきとしいきたるものゝ何者かは哥をしらさるめにみえぬおにかみをもあはれとおもはせたけきものゝふの心をもなくさむるものと古今の序にかゝれたれとむかし

の事にやこのころはさもみえすあさましけにおひたるおきな七人なみるてをのく／＼ひとつつゝよめる哥

か「う」そふれはたまらぬ物をとしといひてことしはいたく老にける哉

をしてるやなにはのイホリエイ○みつ「は」にやく塩のからくも我はおひにける哉

おいらくのこんとしりせはかとさしてなしたこたへてあはさらましを

さかさまにとしをゆかなんとりもあへす過る齡はイやともにかへるとめくるイ

とりとむる△ものにし／あらねは▽とし月を△めはれあなうしと／すくしつるかな▽

とゝめあへすむへもとしとはいはれけりしかもつれなく過るよはひか

鏡山いさ立寄て見てゆかん年へぬる身はおひやしぬると

是は老たる人々のあつまりていたつらにおひぬる事をいひてよめる哥也此ころの人はあまたあつまりたりともをのつからひとりふたりやくもよまん七人からはおもひもかけしかし

人のむすめのやつに成ける哥

神無月しくれふるにもくるゝ日の君まつ程はなかしとそおもふ

これは十月はかりにはゝの物にまかりてをそくかへりければよめる哥也

五節のまひひめのよめる哥

くやしくそあまつをとめと成にける雲路たつぬる人もなき世に

五節の舞姫なれはおさなくこそはありけめこのころはさかしとやにくまむ

またちのむほとのもむかしは哥をよみけるにや

驚よなときはなくそちやほしきこなへやほしきはゝやこひしき

これはおさなきちこをてゝかまゝはゝにつけてをきたりけるかおやの物へまかりたりけるほとにつちしてちいさきなへのかたをつくりたりけるをまゝ母わか子にはとらせてこのまゝ子にはとらせざりければほしと思ひけれとえこはざりけるにうくひすのなきければよめるちなともほしかりけるほとにやおさなき人もちこ「と」も「ゝ」むかしは哥をよみけるとためしになん

乞食の人の家に常にきて物をこひけるを東面にゐたりける人はすさめざりけり西面に居たる人は時く物をとらすればきてよめる哥

をこなひをつとめて物のほしければ西をそたのむくるゝかたとて
このゝちいよくあはれかりてつねに物とらせけるとかや

せひ丸か哥みイ

世中はともかくても有ぬへし宮もわらやのはてしなもイければ

これはあふさかのせきにゐてゆきゝの人に物をこひてよをすくす物有けりさすかに琴などひき人にはあはれかられける物にてゆへつきたりける物にやあやしのくさのいほりをつくりてわらと物をかけてしつらひたりけるをみてあやしのすみかのさまやわらしてしつらひたるこそなとわらひけるをよめる哥也

賀朝法師の人のめにしのひてかよひ侍けるほどにおとこに見つけられてよみかけける

身なくとも人にしられし世中のしられぬ^{やまい}○をしるよしもかな

かへし
もとのおとこ

世中にしられぬやまに身なくともたにの心やいはておもはん

この比の人はさらに哥よましものを

ぬす人ことにかゝりてことのはらはれにければかくれゐて中へまかりけるときにめにわするたと申ければよめる哥

忘るなといふになかるゝ涙川うき名をすゝくせともならなむ

おなしことにて遠江国へまかるにはつせ川をわたるとてよめる

はつせ川わたる瀬さへやにこるらんよにすみかたきわか身と思へは

さるおりにむかしの人は哥をよみければ此比の人には似さりけるとそみゆる

故帥大納言の母高倉のあまうへと聞えし人のもとに参河守なりける人のちいさきめをたてまつりたりけるをまへにた

てられたりけるおき物のつしにをきてめつらしきものなりとてとりもちらさゝりけるかほともなくすくなく見えければあやしかりてをきたりける人のきひしくたつね沙汰しけるにこと○女房にイのちかつきよりたりけるをうたかひてたつねいさかひけるをきゝて

尼上

うらなくてイ同いくのみるめはかりもせよいさかいをさへひらふへしやは

おいける女房

めにちかくおきつ白浪かゝらすはたちよるなをもとらすやあらまし

又同事にてせなかうたれんとしける時によめる哥

おひはてゝ雪のやまをはいたゝけとしもと見るにそ身はひえにける

この哥のとくにゆるされけりとそきこゆる

帥内大臣と申ける人の御もとにてにはかにしにければしとみのもとにかきのせておほちにをきたりけるに草の葉にをきたりける露のあしにさはりけるほとゝきすの鳴てすきけるをきゝてよめる

河内守重之

草のはにかとてはしたり郭公しての山ちもかくや露けき

良暹法師ゆきのふりける日しなんとしければよめる

死出しての山またみぬ道をあはれわか雪ふみ分てこえんとすらん

うせける日よめる

業平中将

つるにゆく道とはかねて聞しかと昨日けふとは思はさりしを

イ大字
ムカシノ人ハイカナルオクニモ哥ヲヨミケレハソラコトノヤウニ○キコユルイ本

「一本以下二十八字ナシ
「よまれしものをと思へときこそはありけりそらことならむやは」

おほかた哥よそをよむには題をよく心うへきなり題の文字は三文字四文字五文字ある題もあるをかならずよむへき文字か

ならずしもよむへからさる文字まはして心字イをよむへき文字あるをよく心うへきなり心をま

はしてよむへき文字をあらはによみたるもわろし」以下衍歟一本ナシた、あらはによむへき文字をまはしてよむへき文字をあらはによ

みたるもわろし」た、あらはによむへき文字をまはしてよみたるもくたけてわろくきこゆとそふるき人まうしけるか

やうの事はならひつたふへきにあらすた、わか心をえてよむへき也題をもよみそのことくならむおりの哥は思へは

やすかりぬへき事也たとへははるのあしたにいつしか哥をよまんとおもはよもイ、さほの山邊にかすみのころもをきせつれ

ははる風にふきほころはせみねのこすゑをへたてつれば心をやりてあくからせむめのにほひにつけてうくひすをさそ

ひ子日の松につけて心のひくかたなれば千年をすくさむ事をおもひ若なをかたみにつみためても心さしの程をみせの

こりの雪の消うせぬるにわか身のはかなきことをなけき花咲ぬれは人の心もしつかならず白雲にまかへ春の雪かとおほめき心なき風を恨み人ならぬ雨をいとひあをやきのいとおもひよりぬれはおもひみたるともくりかへしこのもとにたちよらん事をいひ草のもえ出るにつけてもさわらひをうたかひやよひにもなりぬれは山かつのそのふにたてるも物のすかたにつけてもすける心をあはれひみちとせになるといふなるものことしはしめてさきそむるかとうたかひ春のむなしくすきぬるにつけてもいたつらに年月をくくる事をなけきいつしかと時鳥をまちやすき夢をたにむすはすしらぬ山路に日をくらしおもはぬふせ屋によをあかすにつけてもよむへきふしはつきもせずさ月になりぬれはあやめ草にかゝりぬれは人の心のうきにおほし身のほとをしらぬにひかせななきねをたもにかけ心さしをあさかの沼まておもひにりおもひのきにふかせなとすへき也かくて「こゑ」みな月に成ぬれは時鳥に別れをおしみかきり有て身はくもちにかへるともこゑはかりをはなきとゝむへきことはをかたらひ「みな月」に「も成ぬれは」松かけのいはぬの水を結びあけても夏なきとしかとうたかひよろつにあつかはしき身の有さまをなけきかやりひのくゆるにつけてもことはのつきすへきにもあらず秋のはしめにもなりぬれはつ風のけしきも身にしみおきの葉のそよとこたふるにつけても哀をもよほしたなはたのあふせを待つてわたしもりをたつねかさゝきのわたせる橋をもとめて雲のころもを引かさね給ふらんめつらしきも心をかしく程もなくあげぬる事をなけきなこりのこひしさをいひつくさんにも月の光はいつこもわくましき事なれとあきは猶いかなるかけと^{をイ}おほえ山かつのふせやの内にては雲の上人をうらやみ玉のうてな

にてはあかしの浦をおもひやられ草むらの露をかそへはねうちかはしとふかりもかくれなきまでみゆ山のはよりたち
 いつるももみちすればやおほえ雲間の月の嵐にはれゆくもめつらしく物をおもひ人をこふるにつけてもすぐれたる
 心ちそする木の葉の色付ぬれはにしきのひほをもイときあらしにたくひぬれはなみたをおとしみむろの山に散ぬれはたつ
 たの川に水をうしなひよしの河にみちぬれはわたらん事をなけき雨とふれとも水のまさらぬ事をよろこひ草むらのむ
 しのこゑくくに人にしられはきの花つゆにすかれて庭もせにおれふしをみなへしなにめてられて行かふ人におられ
 花すゝき風にしたかふ心なれはつま木こりにゆく山かつのいやしきをまねきぬしきたまらぬふちはかまをさゝかにの
 いとにかけまかきのはつ霜にをきまとはされうつろふいろみさのえみさほのイ ほ也「た」をたはめ人の心をあくからす冬のものとは
 つゆきめつらしくふりていはほにもはなをさかせあしひたく屋のすゝをもひきかへよもの山邊をかさり草のとさしふ
 りとちつれば人しれすあけん春をまちみちかくれぬれはふみわけてとはん人をまち池のつららひまなくむすふほとに
 成ぬれはたかせの船もかよはずあしまにすたくかものうきねもたえぬ氷せきかたく成ぬれはたまものやとにくること
 たえぬトイ○うらむとし暮ぬれはをくりむかふとなにいそくらんと思ひなからよのならひなれはをのつからつもりぬるこ
 とをなけきよむへきなりこひの哥をよみ身のことをいはんと思はんにはおもひよるへきことはなにゝかあらんなつひ
 きのいとゝもさゝかにのいとゝもおもひよりなほおもひたゆともかきたゆともくるにつけてもくりかへしとも心ほそ
 しとも又心なかしとも思ひみたるともかきみたるともわかてにかけしつはたにかけても折ふしにしたかひていひなか

しつれはをのつから哥めきぬるもの也又そま山とも袖川ともとりかゝりぬれは此暮とも夕くれとも日のくれかたにと
もおつるいかたの過やらすともまたうみのふねなにとりかゝりぬれはつゝきはおほかる物そかしよのうらめしさに
つけてもさほのさすかにもつなよはみとも又たえてあふましにイとも思ひこかるとも人の心のうきたる事をなげきつり
のうけなることをわか身にたとへあまのたくなはくりかへし人をうらみちくるしほに袖をぬらしあさゆふみるめを
かつきよにいきたるかひをひろひうつせかいのむなしき事をわか身によそへあみのひとめをつゝみあまのとまやに旅
ねをしてもかちをかこひにしてとまをむしろにしきあみのうけを草のまくらにむすふにつけてもいふへきことはつき
もせぬもの也おとこは女をつまといひ女はおとこをつまといふにやこれをくせぬをはつまなしといふつまなしといは
んとてはあれたるやとゝいひ津の国のまろやなどにつけていひつれはすへらかにきこゆくれ竹のといひつれはひと夜
のことをおもひいてねにあらはれぬる事をなげきはたけのといひてはなかれてのすゑのよひさしかるへきことを
つゝくへきなりよをもうらみ身をもなげかんとともゆるとくさきにつけていふは草も木もいまめくみはへ出るをいへ
はうちまかせて春夏よむへき也秋冬はその時におひ出ん草木につけてよむへきなりたゝうはの空にはよむへからすほ
にいつといふは心にこめしのひたることを思ひあまりて人にきかせあらはせるをいふ也これをいはんとは春は草の
もえ出るにたとへ夏は時鳥の音にあらはれ秋は花薄のほにいづるによそへ山のはにさし出る月をなかめ冬は袖のつ
らゝのこぼりてちれるにあらはれぬることを云へき也おもひみたるゝと云は〇心はいかにせましとおもふことのあるを

思ひわつらひてなけくを云也それをよまむおりにはかるかやにたとへあさねかみによそへしのふもちすりなにくらふへきなりかならずかくよむへしにはあらすたとへはえおもひよらさんおりにはこれを見て心をえてくさるへきかおほかたかやうのことゝもはつきせぬともいかてはか敷かイかきつくしきふらふへき

おほかた哥のよきといふは心をさきとしてめつらしきふしをもとめことはをかさりよむへきなり心あれ〇とてことはかさらされは哥おもてめてたしともきこえすことはかさりたれともさせるふしなればよしとも聞えすめてたきふしあれとも優なる心ことはくせねは又わろしけたかくとほしろきをひとつのことゝすへしこれらをくしたらん哥はよのすゑにはおほろけの人はおもひかくへきにもあらず金玉と云ものありその集の哥なとこそはこれらをくしたる哥ならめそれを御覽して心をえさせ給ふへき也これらをくしたりとみゆる哥少ししるし申へし

風吹はおきつ白浪たつ田山夜はにや君かひとりこゆらん

しら浪と云はぬす人の名也さるものゝたつた山をおそろしくひとりやこゆらんとおほつかなさによめる哥也

「或本云伊勢物語にくはしくみえたりと」云々

袖ひちて結ひし水のこほれるを春立けふの風やとくらん

春立といふ許にやみよしのゝ山も霞てけさはみゆらん

ほのくくとあかしのうらのあさきりにあしまかくれゆくふねをしそ思ふ

桜散この下風は寒からて空にしられぬ雪そ降^{フリ}ける

恋せしとみたらし河にせしみそき神はうけすも成にけるかな

紅葉せぬときはの山にすむ鹿はをのれ鳴てや秋をしるらん

たのめつゝこぬ夜あまたに成ぬれはまたしと思ふそまつにまされる

吉野河いは波たかく行水のはやくそ人^もを思ひ初^きてし

難波瀉塩みちくれはかたをなみ蘆へをさしてたつ鳴渡る

ひとへに優なる哥

おもひ出るへときはの／やまの√いはつゝし△いはねはこそあれ／こひしきものを√

春立てあしたの原の雪みれはまたふる年の心ちこそすれ

たけたかくとをしろき哥

よそにのみみてやゝみなんかつらきの高天の山の嶺のしらくも

思ひ兼いもかりゆけは冬の夜の川風寒み千鳥鳴なり

よきふしに優なる事くしたる哥

すみ吉のきしもせさらん物ゆへにねたくや人にまつといはれん

胸はふし袖は清見か関なれや烟も波もたゝぬ日そなき

心をさきとして詞をもとめたる歌

古今

吹風にあつらへつくる物ならば此一枝はよけといはれし大伴黒主

吹風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふとみん

をそく出る月にも有かな足曳の山のあなたもおしむへらなり

「此哥或本無之」

よき哥にこはき詞そへる哥

春霞たてるやいつこみよしのゝ吉野の山に雪は降つゝ

野邊近くいゑるしせをイれは鶯の鳴なる聲は朝なくきく

風情あまりすぎたるうた

大そらをおほふはかりの袖もかな散春さくかふ花を風にまかせしイ

水うみに秋の山邊をうつしてははたはり廣き錦ハイとやみんルイ

春雨のふるは涙かさくら花散をおしまぬ人しなけれは

五文字こはき哥

そへにけふ暮さらめやはと思へとも絶ぬは人の心也けり
たれこめて春の行ゑもしらぬまに待し桜はうつろひにけり
すゑなたらかなる哥

桜花ちりかひまかへ老らくのこんといふなる道まとふかに

夢路には足もやすますかよへともうつゝに人め見る事はあらず

黒髪にしろかみましりおふるまでかゝるこひにはいまたあはさるを

聞につみふかきうた

此世にて君をみるめのかたからはこんよのあまと成てかつかん

あすしらぬ命成とも恨をかんこの世にてのみやましとおもへは

けにときこゆる哥

恋しなん後は何せんいけるひのためこそ人はみまくほしけれ

有はてぬ命待まの程はかりうき事しけく思はずもかな

ありへんと思ひもかけぬ世中は中く身○そなげかさりける

心くるしくいとほしき哥

さゝのくまひのくま河に駒とめとてしはし水かへ影をたにみん
夕やみは道たとくし月待てかへれわかせこそそのまにもみん
心さし見せんとよめる哥

をはたゝのいたゝの橋のくつれなはけたよりゆかんこふなわかせこ
山城のこはたの里にむまはあれと君を思へはかちよりそゆくクルイ
みちのくにとふのイのすかこもなゝふには君をねさせてみふに我ねん

おひたゝしきふしある哥

なとてわれへうたゝある／こひを∨はしめけんへしとろにとこの／たちそそよくくまで∨

まてといふに立もとまらてしゐてゆくこまのあしおれまへのたなはし

をこかましきふしある歌

うたゝねに恋しき人を夢にみておきてさくるなれ殿きソかわひしさき
枕より跡より恋のせめくれはとこなかにこそおきあられけれ

ひたふるにきこゆる哥

梓弓思はずにしていりぬるにしを引とゝめてそふすへかりける

山カツイふしの苔の衣はたたひとへかさねはうすしいさふたりねん
よをいとふ賺
とイ

にくからても「人」は別「に」けりとときこゆる哥

忘れなんと思ふ心のつくからに有しよりけにまつそ恋しき

あかてこそ思はん中ははなれなめそをたにのちのわすれ形みに

おもひはなちたるやうにてきすかにねちけたる哥

心有てとふにはあらず世中にありやなしやのきかまほしきさにイ

たのめこし言のは今はかへしてん程なき身にはをき所なし

「をんなはさうなとみゆることをたにあらかふにこそかゝりたれ」いとおしくおいふしたる哥

人しれす絶なましかは侘つゝもなき名そとたにいはまし物を

なき名そと人にはいひて有ぬへし心のとはゝいかゝこたへん

ものに心得たりける人かなと聞ゆる哥

あまのかるもにすむ虫の我からとねをこそなかめよをはうらみし

大かたの我身ひとつの憂からになへての世をも恨つるかな

おもひかけぬふしある哥

奥山にたてらましかは渚こくふなきも今は紅葉しなまし

ふねこき出たらんをみてもみちの哥よむといふ事はおもひかけぬことなりや

春霞かすみていにしゝ鴈金は今ぞ鳴なる秋霧の上に

初鴈をよまむにはるかすみとよまんことは思ひよるへきにもあらずこれらは人のしわざともみえず

おほかた哥のふしはともかくもいひなからからなめり花をおしみ月をめつる事いくそはくそ

身に替てあやなく花をおしむ哉いけらは後の春もこそあれ

まてといふに散てしとまる花ならばなにをさくらにおもひまさまし

かやうにのみよむとおもふにまたちれとよみたるもひか事とも聞えず

古今マ、名残なく散そめてたき桜花ありて世中はてしなけれは

同 惟高親王桜花ちらはちらなん散すとて古郷人のきてもみなくに

はしめの哥は世のはかなき事をいはんとて花をすてたる也つきの哥はこぬ人のうらめしさをいはんとて花をすてたる
なめりはらのあしかりけるにや

イ花をあくとよめるうた

山桜あくまで色をみつる哉花ちるへくも風ふかぬよに

花をあくといはんはあしかりぬへき事なれとめてたきよには風たにふかすと云事いへるイのあれはよをほめんかれうなればけ
にときこえてそ

月なともまた花のことし

足曳の山のはいてし山てイのはに入まで月を詠つるかな

あかなくにまたきも月のかくるゝか山の端にけて入レすもあらなん

かやうに山のはにけてなと「さへ」あるまじきことをさへおもひよりておしむときくに

大かたは月をもめてし是そこのつもれは人の老と成もの

かうもよみるイければされとおひのつもりぬることをなげかんとて月をいとひたるにや月ものいふ物ならましかくイかは月あや

またすとやいはまし

照月をまさきのつなによりつけてあかすわするゝ人をとゝめん

これはこれたかのみこの月夜にあそひけるか月とともに入なんとしければ業平中将のよめる哥也これは月をまさきの
つなしてゆひとめんとよめるにやさらは月のためにいとおしくかのみこもはらたちぬへき哥かなときこゆれとあかぬ
をとゝめんの心のふかければよき哥にもちひイるなめり此ころはいかはかりそしらむとそきこゆる

見るからにうとまじきかな月影のいたらぬさとはもイあらしと思は

これあまねくてらすらんといふことのまことなるかゆへにうとましきイ○といふもめてたくこそきこゆれ

白雲にはねうちかはし飛鷹のかけさへみゆる秋の夜の月

月はあかくよむをめてたきことにすればこの哥こそはよき哥なめれたし此哥をおろしたりとおほしき人は月まことにくまなくともそらをゆかんかりのかけにはうつるへからす猶数さへといふへきなりといへとつらくこの義を思に月まことにくまなけれとそらにゆくかりの数さへに見えずともにみえぬにては猶かけさへとこそよみけめかけといへはいますすしあかくみゆる也されは猶かけさへといふへきとそみ給ふる

照もせずもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物そなき

かうもよめるは花をちるめてたしなとよめる心イ○かうくひすの哥にも

あら玉の年立かへるあしたよりまたるゝ物は鶯うぐひすのこゑ

かやうによむとおもふに

竹ちかくよとこねはせし鶯の鳴聲きけはあさいせられす

時鳥哥にも

行やらて山路くらしつ郭公今一聲のきかまほしさに

かやうによむとおもふに

夏山に鳴時鳥心あらは物思ふ我にこゑなきかせそ

かやうによむ心はへなめりこれは時鳥のにくきにはあらず物思ふおりにきけはいとなけきのまさるよしをよめる也
こともの○もイみなおなし事なればつくしてもしるしまうさす

又哥にはにせ物といふものありコト

山の桜をば白雲によせちる花をば雪にたくへむめの花をはいもかころもによそへうのはなをばまかかしまの波かとうたかひもみちをばにしきにくらへ草むらの露をばおのつからとられぬイつらとしはらぬたまかとおほめき風にこほるゝをば袖のなみたになし汀の水をばかゝみのおもてにたとへこひをばひとりのおもひよそへたかのこゐにかけいはひの心をは松と竹とのすゑのよにくらへつるかめのよはひとあらそひなどするはよもやまのふる事なれば今めかしきさまによみなすへきやうもなけれといかゝはすへきと思ひなからいひ出せるにやまた哥のことはにはらしかもしもへら也

まにくイいまはたゝイマコソイ本ニ見わたせはこゝちこそすれわひしかりけりかなしかりけり「或本无」

つゝ、そもこれらはおほろけにてはよむましとふるき人々申けりとそうけたまはるこれ又よふるイき哥になきにあらず

わか恋はむなしき空にみちぬらしおもひやれとも行かたもなし

しものたて露のぬきこそうすからし山の錦のおれはかつちる

み山には霰降らしとやまなるまさきのかつら色付にけり
これらしとよめるあしきと聞えず

春霞色のちくきに見えつるはたなひく山の花のかけかも
岩そくたるひの上のさ蕨のもえ出る春に成にけるかも

天原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出し月かも

これらにて心うるによくつゝけつればとかともきこえすあしくつゝけつれば花桜といふも照月のといふも聞にくゝこ
そおほゆれへら也なといへることはゝけにむかしのことはなればよのすゑにはきゝつかぬやうにきこゆいもなといふ
ことはなとてかあしからんとはおもへとかくきゝそめたればにやありつかぬやうにきこゆるはいとかりゆけは冬もイ
夜のといへる哥のめでたきかみゝうつしにてきこゆるにやとそ人もまうしゝ見わたせはといへる五文字も松の葉しろ
きとも柳桜をこきませてともよくつゝけつればみわたせはとそこのみよむへきと聞ゆるこゝちこそすれと又もイふるとし
のとつゝけひかけのそひてともいひなしつればはしめのことしつゝききゝにくゝ取なしつればけにあやしとやまうす
へからん又哥をよむにふるき哥によみにせたとをとりたるはいふかひなしまざるさまにイまさゝまによみなしつるはあしからすと
そうけたまはる

家のさくらをみてよめる

貫之

わか宿の物なりながら桜花散をはえこそとゞめさりけり

同題を

花山院御製

我やとの桜なれとも散時は心にえこそまかせさりけれ

紅葉せぬときはの山は吹風の音にや秋を聞わたるらん

もみせぬときはの山にすむ鹿はをのれ鳴てや秋をしるらん

忍れとあらはれにけり我恋は物や思ふとみる人そとふ

忍れと色に出けり我恋は物や思ふと人のとふ迄

鶯の谷より出る聲なくは春くる事をいかてしらまし

鶯の聲なかりせは雪消ぬ山里いかに春をしらまし

さゝれ石のうへもかくれぬ沢水のあさましくのみ見ゆる君哉

さほしかのつめたにひちぬ山河の浅ましきまてとはぬ君かな

君こんといひしよことに過ぬれはまたれぬものゝこひつゝそおる

たのめつゝこぬ夜あまたに成ぬれはまたしと思ふそまつにまされる

秋の田のかりそめふしもしてけるかいたつらいねをなにゝつままし

秋の田のかりそめふしもしつる哉これもやいねのかすにとるへき

思ひつゝぬれはやかもとぬはたまのひと夜もおちす夢にしみゆる

思ひつゝぬれはや人のみえつらん夢としりせはさめさらましを

これらかやうによみまさんことのかたければかまへてよみあはせしとすへきなり

うたのかへしは本哥によみましたるはいひいたしをとりなはかくしていひいたすまじきとそむかしの人まうしたる

かへしをとらぬ哥

恋しさは同じ心にあらずともこよひの月を君みさらめや

返し

さやかにもみるへき月を我はたゝ涙にくもるおりそおほかる

人しれぬ泪に袖は朽にけり逢夜もあらはなにゝつゝまん

かへし

君はたゝ袖はかりをやくたすらんあふには身をもかこふとこそきけ

君やこし我や行けんおほつかな夢かうつゝかねてかさめてか

かへし

イサシ或本
かきくらす心のやみにまとひにき夢うつゝとはよひはさためよ

この哥のかへしをおろいろさかしき人はよひとゝはひか事也さはかりの忍ひことをはいかてよひと「ゝ」はしるへきそこよひさためんといへるこそいはれたれとまうすめりそれもろくのひかことにてさふらふなめりまつこの哥はいせものかたりのことくならはまたもえあはすしてあくる日はほかの国へまかりぬとかけりこよひ又あふへくはこそはみつからはさためし「夢の」やうにて又もえあはて心にもあらずわかぬれはこそこのなからひはいますこしめてたけれ夜ことにあひて日ころにならばむけに念もなきこちすよひとさためよとよめるはまことに世の中の人あつまりてさためよといふにはあらずわれは又もあふましければすへきやうもなしとていかにもえしらぬよしにていひすてゝいぬるなりかくよひとさためよといへることそこの心も哥の心もえもいはぬことにてはあれこよひさためんといへる人は和哥の外道也きゝいるましき事か

かへしともおほえぬかへしある哥

みすもあらずみもせぬ人の恋しさはあやなくけふやなかめくらさんきイ

かへし

しるしらすなにかあやなくわきていはん思ひのみこそしるへなりけれ

「已下別也」

この哥のかへしをすへき心はみすもあらずみもせぬ人のといへれはいつか見えつるそらことゝもみえなはさもおほえしともまことにさ思はうれしともそよむへきこのかへしの心はおまへはたれとかまうすすみかはいつこそそのたまへ尋ねてまいらんとよみたらん哥のかへしと○きそイこゆるされとまことにあしからんには古今にいらんやはかうおもふまことのひかことなめりされはかやうにかきたるを御らんしてあしとも又さもいはれたりともおほしめさんおほくの事也

哥の返しに鸚鵡かへしと申事ありかきたる物はみねと人のあまた申すこと也あふむかへしといへる心は本哥の心ことはをかへすして○ことおなしイはをいへる也えおもひよらさんおりはさもいひつへし「已上別也」

「已下別也」

ふるき哥の中にならず哥のおもてそイよみわふへきものゝ名をいはて心におもはせたる哥ある也

* 「或本云タ、イマミユルコトヲサ、ヘテヨムニハナラスシモ哥ノオモテニヨミノセヌコトアリ」

うくひすを題にする哥に

索性

古今マ、
木つたへはをのか羽風に散花をたれにおほせてこゝらなくらん

花のちるを題にする哥

とのもりのとも宮つこ心あらはこの春はかり朝きよめすな

黒主

古今マ、

吹風にあつらへつくる物ならば此一えたはよけといはまし

ふねを題にする哥

かのかたにはやくきよせて時鳥みちになきつと人にかたらん

帰鷹を題にする哥

春かけてかく帰るとも秋風に紅葉の山をこえさらめやは

紅葉をたいにする哥

から錦枝に一むらのこれるは秋のかたみをたゝぬ成けり

「已下別也」

これらはよく哥おほえつきてよむへきことゝそ人まうしけるこの比の人のよみたらは初の鶯の哥は花のきにはかならずしも鶯やはゐるといはまし物を次の花の哥はこゝのへのうちにはかならず花のみやはちりつもりてとも宮つこあさきよめにすらん大裏にはちり山といへる山○「右兵衛」の陣におほきなる山ありその山は大裏につもれるちりを

とのもりのつかさのあきことにはきあつめてすてたる塵の久しくつもりてなれる山なりそれをみれば花のみやは九重にはつもるへきなを「はなと」いは「さら」んは荒涼にそきこゆる次の哥はあらし風はえたをもふきおるものなり又紅葉とも心えんにひか事にあらし次の哥ははやこきよせよといへるをふねのみやはこくへきうき木もありいかたといへる物もあればたゞこくといはんはかりにてふねをいはんことかたし次の哥は春ものにゆきてかへるものは鴈のみやは有へき人も物へゆきて帰らんにもみちの山をこえんにかたかるへきかは次哥はえたに一むらか^{のこ}らん事はもみちのみやはあるへきといひて難しつへしされとふるき哥にて三代集にを^のいれりこれらをためしにてこの比の人もおつ^くよむ也猶さりとよく此みちにおほえあらん人のよむへき也いともそのかたにおほえなからんものはよむへからず「已上別也」

*或本云コレラハヨク哥オホヘツキテヨムヘキナリコノコロノ人ノヨミタラハムメノエタニハカナラスシモ
 ウクヒスノミヤハギルス、メモカラスモノカハトイヒコ、ノヘノウチニハハナノミヤハアルヘキチリナトモ
 ツモレハコソハヒヲヘテアサキヨメヲハスラメトモイヒツヘシホト、キスノ哥モフネトモナクモミチノ哥モ
 エタニヒトムラトハカリヨミテコノハノユクエモシラネハオホツカナケレトモカ、ル哥ノミオホカレハコレ
 ヲタメシニテヨノスエニモトキ^くキコエコレラハ詩ノ心トソウケタマハル詩ハ題ノ文字ヲハスエテコ、ロ
 ハヘラシテ題ヲマハスモノナレハソレヲマネフナメリソレヲシラヌ人ハカタフキオモフナルヘシ云々

世に歌枕といひてところの名かきたるものありそれかなかにさも有ぬへき所のなをとりてよむつねの事也それはうちまかせたることにはあらずとそ申つたへたるされとよまれぬおりはさやうにかまへたるもあしくもきこえずつねに人のよみならしたる所をよむへきなりその所にむかひてほかのところの名をよむは有ましきこと也たとへはさかのにゆきてその野はよみにくしとてみよしのともかすかのともあたこ山にむかひてたつたの山ともおとこ山ともかつら川にのそみてよし野川ともみたらし河ともいはんはひかこと也のをよむへきつゝきならば野へともものちとも秋ならば秋野とも春ならばはる野とも折ふしにしたかひてよむへきなりつねにもみゝなれぬ所の名はことのはつゝきにひかれておもふ心ありとみえてよむへき也たとへはなきなとりたらんおりに哥よまんと思わ^は

なきなのみたかおの山といひたつる人はあたこのみねにやあるらん

なき名のみ立田の山のふもとにはよにも嵐の風も吹なん

なにしおはゝあたにそおもふたはれ嶋波のぬれ衣いくへきぬらん

これを心えてかやうによむへきなり

よろつの物のなにはみな異名あり^{*}これらをおほえてよまれさらんおりはつゝきよきさまにつゝくへき也

*カキタツヘシツネニイヒナラハセルナノツ、キアシキトキハソレヲオホエテモシツ、キニタカヒテクサリ
ツ、クヘキナリイ本ニ

天	なかとみと云	地	しまのねと云	日	あかねさすと云
月	ひさかたと云	塩海	おしてるやと云	水海	にほてるやと云
鳴	まつねひこと云	磯	ちりなみのと云	波	ちるそらと云
海底	わたつみと云	河	はやたつ <small>をイ</small> のと云	山	あしひきのと云
野	いもきのやと云	巖	よそねしまと云	高峯	あまそき <small>ちイ</small> のと云
峯	さはつねと云	谷	いはたなと云	瀧	しらいのと云
神	ちはやふると云	潮	ころしまのと云	大和	しきしまのと云
平城京	あをによしと云	臣	かけなひくと云	民	いち <small>らイ</small> とゆきと云
人	ものふと云	父	たたちおと云	母	たたちめと云
夫	たまくらと云	妻	わかくさのと云	夫婦親族	か <small>カ</small> ひのすきと云
男	いはなひこと云	女	はしけやと云	海人	なこしなふと云
顔	ますみいろのと云	髪	むはたまと云	心	かく <small>タクイ</small> のあはと云
思	わか <small>クイ</small> しなみと云	衣	しろた <small>イイ</small> へのと云	枕	しきたへのと云
年	あらたまのと云	月	しまほしのと云	日	いろかけにと云

時	つるのまと云	句	ころほひのと云	春	かすみしくと云
夏	かけろふと云 ^{のイ}	秋	さちきりのと云	冬	こるつゆのと云 ^{タイ}
朝	たまひまのと云	夕	すみそめのと云	夜	ぬはたまと云
夢	ぬるたまのと云	暁	たまくしけと云	京	たましきのと云
田舎 ^{キナカ}	いなこきと云	道	たまほこと云	橋	つくしねと云
旅	くさまくらと云	別	むらとりと云	常	ときとなしと云
寶物	あやひこねと云	木	やまちきのと云	草	さるたつまと云
竹	からはしのと云	花	しめしいろのと云	菓	しまひこのと云
浮物	うつたへにと云	風	しまなひくと云	雲	たにたつのと云
霧	ほのゆけると云	霞	△しとたまひねと云／しまひねと云▽	雨	しつくしてと云
露	しけたまのと云	霜	さはひこすと云	雪 ^{ユキ}	いろきえすと云
浅	いさゝなみと云	不忘物	うたかたのと云	古 ^{フルキ}	かりほしのと云
新	いれしなひのと云	煙	ほのゆけると云		

他書云

天	あまのはし <small>ら</small> と云	地	あらかねと云	月	ますかゝみと云
内裏	△こゝのへと云／もゝしきと云▽ 東宮	はるのみやと云	中宮	あきのみやと云	
皇帝	すへらきと云	男	せなと云	女	△わきもこと云／わかせこと云▽
朝廷	わかくさのと云	簾	玉たれのと云	夏	かけそひくと云
暁	しのゝめと云	風	しのゝおふきと云	君	さきたけのと云
下人	やまかつと云	海	わたつみのと云	海底	わたのはらと云
山河	たまみつのと云	庭水	にはたつみと云	船 <small>フネ</small>	△うたかたのと云／あまのもかると云▽
賤男	しつのおたまきと云	鶴	あしたつと云	書	たまつさと云
女神	ちはやふると云	筆	みつくきと云	空 <small>ソラ</small>	ひさかたと云
兵衛	からは <small>し</small> きと云	近衛	みかさの山と云	壁生草	いつまてくさと云
郭公	してのたおさと云	鶯	もゝちとりと云	鹿	すかると云
猿	ましと云	鬼 <small>こく</small>	こゝめと云	蛙	かはつと云
蘭	ふちはかまと云	雉	きゝすと云		

これらかきあつめたれとよみにくきものはよますさもありぬへきはみなよみためり

又春雨をははるさめと云夏雨をはときあめと云十月雨をはしくれといふ秋もよめともうちまかせたることにあらぬ
にや

我やとのわさ田もいまた刈あけぬにまたき降ぬる初時雨哉

これそ秋のしくれに人のまうす哥のおもてにあきともみえずされはわざたといふはとくいてくるたをいへは猶あきの
哥そといへと猶うかれたり古今にすゑはかはりてありいかなる事にかみそれといふは雪ましりてふるあめをいへは冬
もしは春のはしめなどによむへきにやひちかさあめといふはにはかにふるあめをいふ笠もとりあへすにはかにふれは
そてをかつくなり

いもかかと行すきかてにひち笠の雨もふらなむあまかくれせん

こしあめといふはいたうふる也ぬれとをりてはかまのこしなどのぬるゝほとなるをいふ

久かたのはにふのこやにこし雨ふりこしさへぬれぬに身そへわきもこ

はにふのこやといふはあやしきいえのいたしきなとなくてわつかにねところはかりにいたのまねかたをひろひしきた
るをまうすとかや

又風の名はあまたありけなりおほかたの名はしまなひくといへりふはイこちといへり東の風をいふあめゆイの風といへりふそれ

○東の風もイ也あなしといふ風ありいぬゑの風とかやしなどの風と申てなかとみイ○はらへみイによむ風是なりひかたといふ風あ

ヒルハフカテヨルフクカセナリイ
りたつみの風なりこゝろあひの風といふ風ありさいはらにみえたり○しのおふふきと云風あり是もさいはらにうた
へるなり山おろしの風といふ風あり山のみねよりふもとさまへ吹おろすかせなりこからしといふ風有冬のはしめにこ
の葉をふきちらす風なりこれら○哥ともみなあれともさせることなければしるしまうさす
カホカニカセノナトモオホカレトコトニ哥ニヨマサルヲハイ本

わかやとのわさ田かりあけてにえすとも君かつかひをかへしはやらし

にほ鳥のかつしかわせをにえすともそのかなしきをとにたてめやは

にゑすともといふは春立らんとする時によろつにもよき人のさはりなきをいくたりともかつをさため
て○たふるにしたかひて物をくはせてとしきといふ物をきらする也その木はほそなかなる木カイのえたもなきをきりてす

ゑにちいさきかめに水をいれておとろといふものをくしてさきにゆひつけていへのしりへにたてゝそのとしの秋つく
りたる田の刈へきほとになりぬる時にかのとしき切し人々をよひあつめてかとをさしておものにしていそぎくふ也そ
のほとに來たる人にはいかにもあひことをたにせざる也たとへはとしころゐ中なとにあるおやなときていらんといふ
にもいらへをたにもせすさる日なりとも君かつかひとたにもきかはかならずいれんと心さしあるよしをよむ也後の哥
のにほとりといふ五もしははしめてといふことは也にゐなといふおなしことにやかつしかわせをといふ「は」こ
とはゝいねにてあるをおものにせんとてこめにすかなゝりわせといふはとくいてきたるいねをいふなり

箸鷹の野守の鏡えてし哉思ひおもはずよそなからみん

むかし天智天皇と申けるみかど野にいて、たかかりせさせ給ひけるに御鷹そりてうせにけりむかしは野もりとて野に
まもるものありけりそれをめして御たかそりうせにたりたしかにもとめてまいらせよとおほせられければたまは君に
おもてをむくる事なしうつふしにゐてつちをまほりて御たかはおかの松のほすゑにみなみにむきてしかはへりと
申ければおきとらせたまひにけりそもくなんち地にむかひてかうへを見ることなしいかにしてこすゑに居れるたか
をしるそやとはせ給ひければ野守のおきな民は公主におもてをましふることなしはのうへにたまれる水をかゝみ
としてかしの雪をもさとりおもてのしはもかそふるものなれはそのかゝみをまもりて御たかの木をえたりと申け
れはその後野中にたまれる水をのりの鏡とはいふなりとそいひつたへたるに野守のかゝみとは徐君かかゝみなりそ
のかゝみは人のこゝろのうちをてらすかゝみにていみしき物なれば世こそりてほしかりけりこれさらにわれもちとけ
しとおもひて塚のしたにうつみてけりとそ匡房の帥まうされしいつかまことならん

忘草わかしたひもにかけたれとおにのしこくきことに有けり

わすれ草かきもしみゝに植たれと鬼のしこ草なをおひにけり

おにのしこ草とはむかし人のおや子をふたりもちたりけりおやうせにける後こひかなしむ事年をふれとわするゝこと
なしむかしはうせたる人をはつかにおさめければこひきたひにあにおとゝあひくしつゝかのつかに行むかひてなみ
たをなかしてわか身にあるうれへをもなけきをもいきたるおやなとにむかひていはんやうにいひつゝ帰りけりあにの

おとこやうくとし月つもりておほやけにつかへわたくしをかへりみるにたへかたきことゝもありておもひけるやうたゝにてはおもひなくさむへきやうなし萱草といふ草こそ人のおもひをわすらかすなれとて萱草をそのつかのほとりにうへつそのゝちつねにきてれいのみはかへやまいるとてさそひけれとさはりかちになりてくせすのみなりにけり此おとゝの男いと心うしと思ひてひのひとをこひまうすにこそかゝりて日をくらし夜をあかしつれわれはわすれまうさしとて紫苑といふくさこそ心におほゆることはわすれさなれとてしをんをつかのほとりにうへてみければいよくわするゝことなくて日をへてしあるきけるをみてつかのうちにごゑありて我はそのおやのかはねをまほる鬼也ねかはおおそるゝ事なかれ君をまもらんとおもふといひければおそりなからきゝをりければ君はおやに孝ある事とし月ををくれともかはることなしあにのぬしはおなしくこひかなしみてみえしかとおもひ忘草をうへてそのしるしをえたりそこは紫苑をうへて又そのしるしをえたり心さしねんころにしてあはれ〇とこゝろすくならず我鬼のかたちをえたりとも物をあはれむ心あり又日のうちの事をさとる見えん所あらは夢をもちてしるしつけんといひてこそゑやみぬそのゝち又の日あるへきことを夢にみる事日としてやむ事なしこれをきけはしをんはうれしきことあらん人はうへてみなく事あらん人はうふへからさる草也されは志許草とは心さしのもとのかくさとはかくなり

あさもよひきのせき守かたつか弓ゆるす時なくまつゑめるかなきみイ

たつかゆみへてにとり／もちて▽あさかりに△君はたちぬきマロイ／たなくらの野に▽にイ

ひすと鳴つゝをのくまかりにけるとかや

花山院御製

露の命草のはにこそかゝれるを月の鼠のあはたゝしきかな

草の根に露の命のかゝれるを月のねすみのさはかしきかな

これは世のはかなき事のたとひに^{ヘイ}法文にある事とそうけたまはるとへは人ありてはるかなる野邊をゆくに虎にはか
にきたりてその人をくはんとす人にかけてはしるほとに野の中にふるき井のやうなる所にはしり入てなからはかりにあ
る草をひかへてみれば井のそこにわにといふものゝ口をあきておち^{タイ}○らはくはんとおもひてまちゐたり目のおほきに
しろきことかなまりのことしはのしろく長きことつるきことしお^{チイ}のいりつるかみをみればおひつるとら又くちをあ
きてのそく「そ」の「の」たのみてひかへたるくさのねをしろきねつみくろき鼠ふたつしてかはるくつみきるきれなは
おりいりてそこなるわにゝくはれんとすおちいらさらんさきにかきあからんとおもへはうへのとらまちくはんとおも
へりこれはすなはちこの世の中のたとへなり底にくちをあきておちいらはくはんとするわにはわかつゐのすみかの地
獄也うへにをひ入つる虎はこの世にてつくる業障煩惱なりたちかはりつゝ草の根をつみたるふたつのねつみは月日の
過^{スキ}行なりしろきねつみは日なりくろき鼠は月なり月日のすきゆくさまなんかのねつみの草のねをつみきるやうにほと
もなきといふたとへ也これらを見て心あらん人は世のはかなき事はおもひしりぬへし

わたつみのとよはた雲に入日さしこよひの月よすみあかくこそ

夕されは雲のはたてに物所思ふあまつ空なる人をこふとて

とよはた雲といふは雲のはたてといふ同し事也ひのいらんとする時西の山きはにあかくさまくなる雲のみゆるかはそのあしの風にふかれてきはくに似たる也はたといふは常にみゆる佛の御まへにかくるはたにはあらずまことのぎにしきにたて又たゝかひなとするにたつるはたなりその旗ににたる雲のたえまよりいりひのさして入ぬれば三日はかりは雨ふらずしてそれも心よくてる也されはこよひの月はすみぬらんとよむなり次の哥そのくものさためもなくさはきかはりゆくやうになんおほゆるとよめる也その雲のそらにあるものなれはうはの空なる人をこふるによそふるなりこれを又蛛といふむしの手はやつあれはそのくものすはのきにみゆるものゝてをくみたるやうにみゆればそれによそへてよむ也ともいふなりこれもことの外のひか事にはなきにや重之かしたるくものゝけさまにふしたるに風のふきければいきたるやうに手のはたらきけるをみてよめる哥

さゝかにの雲のはたてのうこく哉風こそくもの命成けれ

これをみればむしの手をもくもてといはむにとかなし

恋せしとなれるみかはやつはしのくもてに物を思ふころ哉

もろともにゆかぬみかはその八はしは恋しとのみや思ひわたらん

これらをもあれにおもひよそへてくも手といふも蛛の手の八つあれはなとまうすなめりされと此やつはしを尋ぬれば川などにとわたしたるにはあらてあしをきのおいたるうきのみちのあしければたゝいたをさためたることもなくところくく渡したるなればやつはしとはいひそめたる也ものゝ数はかならずしも八つなけれといひよきにつきてやつはしとはいふにやくもてといふははしの下にはよくてよろほひたふれもそするとはしらをたよりにて木をすちかへてうちたるをいふなりそれはしにのみ打にはあらすたななどのよはくてたふるへきにもうつめればくも手といふはさためもなしかのやつはしにはくもてうつへきはしともきこえねとはしといふにひかされてよめるなめり古き哥はさやうにのみこそはよむめれ此ころならばそのはしにくもてなしとやいはん又「已下或本」いたをさためもなくをきちらしたるさまのくもてにたればよそへてよめるにや「已上」

にしき木はちつかに成ぬ今こそ是人にしられぬねやのうちみめ

あらてくむかるとたてたる錦木はとらすはとらすたれわかやくるしき

錦木と申事はみちのくと申くに、イにおくと「まうす」ところイ国におとこをんなよはゝむと思ふ時にふみをはらやイしてたきゝをこりて日ことにひとつか束その女の家のかるとたてけるをみて達んとおもふおとこのたつるをはほともなくとりいれつればそのゝちはきをはたてゝひとへにいひよりしたしくなりぬあはしとおもふおとこのたつるはいかにもとり入ねはちつかをかきりにして三年たつる也それになをとりいれねはおもひたえてのきぬこの木をにしき木といふ事は狛梓のさほの

やうにまたらに色とりてたつれはいふなりとそしたりとおほしき人まうせとまことにはさもせぬとかやにしきゝといふことにつきて云にや

あらてくむと云色もしは山かつのいやしきやとはいゑのめぐりにかきをしてみつくみにしたるわらのくみをもちてそのかきをしめたるをいふなり

錦木はたてなからこそ朽にけれけふの細布むねあはずして

みちのくのけふの細布ほとせはみ胸あひかたき恋もするかな

此けふのほそ布といふ事はこれもみちのくにおくに鳥の毛けしておりけるぬの也はたはりもせはくひろもみしかければうへにきる事はなくて小袖などのやうにしたにきたる也されはせなかはかりかくしてむねまてはかゝらぬよしをよむ也

岩代のはま松かえを引むすひまさしくイらてあらは又かへりこん

これは孝徳天皇と申たるみかとのくらゐをさりたまはんとし給ひける時ありまの皇子と申わうしにくらゐをゆつりたまふへきをえた「り」もつましきけしきをみてゆつりたまはさりければうらみ申給ひて野山にゆきままとひ給ひていしろと云所にいたりて松のえたをむすひてよみ給哥也

家にあれはけにもるいひを草枕たひにしあれは草のはにもる

是もそのほとによめるとそかけるむすひ松の心はたむくといふおなしこと也松をむすひてこれかとけさらんさきにかへりこんとちかひてむすふなりきてまさしくあらはとはよめるなり

しら浪のはま松かえイの葉の手向草いくよまてにかとしのへぬらん

松をむすひてとしにしたかひて花をももみちをも祈りてたむくる也手向くさとはこれらをいふなりありまの皇子かくのことくまとひありき給ふよしをきゝてよの人あはれかりけり

大寶元年に文武天皇と申すみかと紀伊國におはしましてあそはせたまひける御ともに人丸さふらひてかの皇子のむすひたまひたりける松をみてよめるうた

後みんと人のむすへる岩代ヨシのこまつかうれをまたみけんかも

おなしたひ吉丸ヨシかよめる

岩代の岸のこ松をむすひたる人はかへりて又みけんかも

此ころの人はいはしろといふ所のあるとはしらてうせたる人のあるつか也むすひ松といふはしるしにうゑたる木也されはいはひのところにてはよむましきよしをいふはひか事にや

後冷泉院コノ通ニ可書の御時に永承四年十一月九日哥合によめる

左

能因法師

春日山岩根の松は君かためちとせのみかは万代やへん

右
すけなかの弁 資仲殿

岩代の尾上の風は年ふれと松の緑はかはらさりけり

これを大二條殿と申し、関白殿の其座にさふらはせ給ていまた判者のさためまうさぬさきにかすかとよまれたらん哥はいかゝまけんさたにもをよふましと申させ給ひたりければさることにて又沙汰することもなくてかちにけり藤氏の長者にてまうさせ給ひければめてたき事にてやみにけり右ノ哥はいはしろの松よまれたれとその座にはさたする人もなくてやみにけり後に人のかたりければようもしらぬことをいふなりとそ作者申されけるその人の子の顯實の宰相申されしいはしろの松はうせたる人のつかの木にはあらずとも有馬間の皇子のよからぬ事によりてまとひありきたまへりけることのおこりをおもへは哥合によまでもありぬへしとそうけたまはりし

いな薙川そひやなき水ゆけはなひき臥そのねはうせす

いなむしろとは稻のほのいてとゝのほりて田になみよりたるなんこゝろむしをしきならへたるといふなり又河つらにおひたる柳のえたの水にひたりてなかるゝかまたいなむしろににたる也その柳のもととはたらかて枝の水になかれて波よるなんわわがかくあやしくくなりてまとひあるくに似たるとむかしみかとのすゑなりける人のあやしきわらはになりてつりするものにてその柳のもとにゐてつりすとてこの哥をひとりことにうたひけるとそいひつたへたる

或本云 後拾遺 顯綱云々

おほつかなちくまのかみのためならはいつくかなへの数はいるへき

近江なるちくまの祭とくせなんつれなき人のなへの数みん

これはあふみのくに、ちくまの明神と申ておはします神のおほんちかひにて女のおとこしたる数にしたかひてつちしてつくりたるなへと申すものをそのかみのまつりの日たてまつる也「君の」男あまたしたる人はみくるしかりてすしをたてまつりなとしつればものゝあしくてやまひなどしてあしければつゐにかすのことくたてまつりて祈などとしてことをりける

いかにせんうさかの森にみえずとも君かしもとのかすならぬ身を

是は越中國にうさかの明神とまうす神のまつりのひ榊のしもとして女のおとこしたるかすにしたかひてうつなり女そのおりになりてねきに「しりを」まかせてふせりねきしもとをもちて数をとふ「かすのことし」はしめのなへのことしおほかるははちかましさにすこしをいへはたちまちにはなちあへ^血なとしてまさかさまにはちかましき事のある也但ふるき哥のみえねは俊頼か哥をしはしかきて候也

東路の道のおくなるひたち帯のかことはかりもあはんとそ思ふ

これは常陸国に鹿嶋の明神と申す神のまつりの日女のけさう人の名ともをぬのゝおひにかきあつめてその人のかすに

したかひて神のおまへにをくなりそれかおほかる中にすへきおとこの名かきたるおひのをのつかからかへる也それをね
きかとりてえさするを女みてさもとおもふ男のおひなるはやかてそのおまへにてするなりおひさしつるのちはおもひ
かへしてせしとおもへと男心かゝりてした「か」くなりぬたとへはうらなふ事のやうにするにや

たゝにあひてみせはのみこそたまきはる命にむかふ我恋やまめ

かくしつゝあらくせよみにたまきはるみしかき命長く成ぬる

これはたまきはまりぬといふなり人のとしおひきはまりていまいくはくもあらしと云事也

たまきはるうちのおほのにこま^なとめてあさふますらんそのくさふけの

ます鏡みつといはめやたまきはるいはかきふちのかくれたるまつ

このたまきはるははしめのはかはりたりたまきといふことはよろつの物をほめんとおもふおりにはなにゝも玉とい
ふことはをそへてよむ也されはこれもたまきはるとは春をほめんとてたまのはるといへる也次の哥もいはかきふちを
ほめむとてたまきはるといひをける也これをあしわ^ちわ^ひきてもしらぬ人はいのちをよむなめりとおもへとさもつつかぬ哥
もありとておほつかなき事にいひて尋ぬるとそ見たまふる

三吉野のたのむの鷹もひたふるに君か方にそよるとなくなる

かへし

わか方によると鳴なるみよしのゝたのむの鷹をいつか忘れん

これは伊勢物語の哥也むかしむさしの国に男まとひいにけりその国にはへりける女をよはひけりちゝはこと人と思ひけるをはゝなんあてなる人にとおもひけるちゝはたゝ人にて母なん藤原なりけるさてあてなる人にとおもふなりけりすむ所むさしのくにゝいるまのこほりみよし野の里也

雲るにもこゑ聞かたき物ならはたのむの鷹もちかく成ユキイ本なん

かへし

ことつてのなからましかはめつらしきたのむの鷹に知れさらまし

このたのむのかりといふ事はよの人おほつかなかる事也このころさやうの事知たりとおほしき人のまうすはひんかし国に「しゝ」かりする人のたのもしかりとてかたみに寄あひてかりをしてその日のしゝをとりたるかきりむねとをこなひたる人にとらするなりさて又の日はかたみことにてたかひにする也それをたのもしかりとはいふとそ申すめるされと此こゝろこの哥ともになはすあの伊勢物語の哥は母このあて人にあはせんとおもひ父はこと人にむことらんとしけるをきゝてむすめのすゝみておこせたりける哥也なくなるとよみたるはかりかねとこそ聞えたれしゝかりはなくへきことにあらすかへしにもわか方によるとなくをいつかわすれんとよろこひたれば本哥におなし心也次の哥は大蔵史生豊景といひけるものゝおほるのみかとの邊にすみける人にかよひけりさやうにかよふ所おほかるなかにこの女のい

糸のまへを音つれもせて通りたれば女いかゝいひたりけんかくよめるなりこれも猶かりかねをよめるところ聞えたれしゝかりとはおほえす

さかこえてあつのたのむにゐるたつのもしき君はあすきへもかも

万葉集にかくよめりこれかりの哥ならねとも心得あはするに猶かりかねとそきこゆる本ノマ、たいはたるしゝかりと心うへき哥みえすたのむの鴈の哥あまたあるにれとイみなくもゐにはなかせてまちかくなきたるよしをよめりたのむといふは猶田のおもてといへる事なめりたのむとよみてくもゐになくとよみたらはそひかことなるへき

忘るなよたふさにつけしむしの色のあせなは人にいかにこたへんかへし

あせぬとも我ぬりかへん唐土のいもりもまもる限こそあれ

ぬくくつの重ることのかさなれはいもりのしるし今はあらしな

ゐもりといふ虫はふるき井なとにとかけに似て尾なかきむしの手足つきたる也これはもろこしにする事なめりこゝにはむしはあれともするやうをしらねはつくる事なしとをききなとへまかる時にかいなにつけつればあらひのこひすれともおつる事なしたゝ男のあたりによるおり落る也ぬく沓のかさなることのかさなれはとよめるは女のみそかおとこするおりにはきたるくつのぬくおりにをのつからかさなりてぬきをかるゝなりさてかくよめる也

わきも子かひたいの髪やしらイくらんあやしく袖に墨のつくらん

人をこふる女のひたいのかみのしらイくといふことのあるなり人のかみはぬれたるをなてつくろふにこそからりたれ涙にぬれぬるひたひかみをこひするほどによろつをわすれてうつふしたればひたいかみのしらイくらんことはりなりくつのかさならんことこそかならずしもやおもへとさるおりにかはかな「る」なればふみにそらことなきためなり

いとせめて恋しき時はうは玉のよるの衣をかへしてそきる

こひする時はよるきるきぬをかへしてぬれはその人のかならずみゆる也万葉集には袖はかりをうちかへすとよめり

いもか門出入河の瀬を早みこまそつまつくいゑこふらしも

人にこひらるゝ人の乗たる馬はつまつくといへることのあるなり

まゆねかき△はなひ／ひもとき▽まつらんや△いつしか見んと／おもふわきも子▽

まれにこん人をみんとそひたりてのゆみとるかたのまゆねかきつる

まゆねかくといふ事はめつらしき人を見んとてはまゆのかゆきなりそれにとりてひたりのまゆは今すこしかなふとかやはなひる事もひもとくるおなし心也

或本云はなひる事は人にうへいはるゝ時ひるとそいへるうたにはめつらしき人みんとするときはなひるとそかける云々

今こんといひしはかりを命にてまつにけぬへしさくさめのはし

かへし

数ならぬ身のみ物うくおもほえてまたるゝまでも成にける哉

これは後撰の哥也人のむこのひさしくみえさりければしうとめなりける女のむこのかりつかはしける哥也さくさめのとしといふことしりたる人すくなし行成大納言のかきたりける後撰にはてのとしといふもしを刀自とかゝれたりけるにあはせて匡房中納言のまウイゝしゝはさくさめとはしうとめといふこと也されはあの哥のはてのとしといへることはとしにはあらで刀自也そのしうとめか刀自にて有けるなめりとそ聞ゆる

かそいろはいかにあはれと思ふらんみとせに成ぬあしたゝすして

この哥はあさつなの卿の哥也いさなみのみことはひることいふ子をうみたまへるなりかたちは人に似たれともふくさのきぬなどのやうにて足もたゝすおきもあからさりければさほなとにうちかけてをきたりければあしもいはて年月ををくりけり三年までそ有ける朝綱おほやけのかしこまりにて三年ありければわか身なん彼ひるこのやうにていふかひなくて三年になりぬるとかれによせてよめるなりかそいろとは父母といふ事也いさなみのみことは神名也

しなかとりゐなのをゆけはありま山夕霧立ぬともはなくして

しなかとりゐなやまとよみ行水の波のみよせしかくれつまかも

るなのとは津の国にある所也ゐなのといはんとてしなかとりとつゝくる事を人の尋ぬる事にてたしかなる事きこえす昔雄略天皇その野にてかりしたまひけるにしろきかのしゝのかきりありてゐのしゝのなかりけはいひそめたる也しなかとるといふはしろきかのしゝのかきりとられたれはいひひなのとはゐのしゝのなかりけはいふなりとそ申つたへたるゐひにかりきぬのしりのなかりければつちにかりきぬのしりをつけしとてこれはしなかとりとまうすとそ人申めりそれはみくるしいつれの山所イには人のぬるみイにかりきぬのしりのつちにさはらぬはあらんとする

山鳥のおろの初尾に鏡かけとなふるにこそなきよけりけめ

此哥のかゝみの事たしかにみえたる事なしむかしとなりの国より山鳥をたてまつりて鳴こゑたへにしてきくものうれへをわするといへりみかとこれを見てよろこひてかひ給ふにまたく鳴事なし女御のあまたおはするに此山とりなかせたらん女御を后にはたてんと宣旨を下されたりければ思ひはかりおはしける女御のともをはなれてひとりあればなかなめなりとてあきらかなるかゝみをこのつらにたてたりければ鏡をみてよろこひたるけしきにて鳴ことをえたり尾をひろけてかゝみのおもてにあてゝよろこひて鳴聲しけし是をなかせたる女御後にたちてかたはらの女御ねたみそねみけりとふみにありといへりこれか心をとりによめるとそ

足曳の山鳥の尾のしたりおのなかくし夜を独かもねん

此哥は山鳥の尾をしもなそ長きためしにはよめるにかと思て尋ぬれば山鳥と云とりのめおとこあれともよるになれば

山の尾をへたてゝひと所にはふさぬものなればよのなかくたへかたく思ふらんとおしはかりてことはさらんものをこそは尋てよするかゆへにかれか尾も鳥のほとよりは長ければよめる也かくよるになればわかるゝいもせなれば人の家にはおをたにもとりいれぬなり

時鳥鳴つる夏の山邊にはくつゝいたさぬひとや渡らん

これは寛平御時のきささいの宮の哥合の哥也郭公ともすとはさきの世にてはあひしれるともならしとぞそのい「と云鳥はまことにほもす」といふ鳥也そのもすを「ほとゝきす

「とい」「ふ也」昔くつぬひにて有ける時くつのれうをとらせさりければいま四五月はかりにならはたてまつらんと

いひてうせにけりそのゝちいかにも見えさりければはかるなりけりと心えてくつをこそえさせさくらめとらせしくつ

「て」をたにかへしとらんとおもひてとらせんとちきりし四五月にきてほとゝきす「こそ」とはよひありくなれもすりい

「まろ」はそのころもよにはあれともあきつかたするやうに木の末にゐてこゑた「か」にもなかてをともせずかきねを

つたひありきてときくひやかにことくしうとはかりをつふやきなくなり此事ひかことならはむかしの哥合にあ

らんやはとそいひつたへたる

岩橋のよるの契もたえぬへし明る侘しきかつらきの神

この哥はかつらきの山とよしのゝ山とのほさまのはるかなるほとをめぐればことのわつらひあれは役行者といひける
修行者「といひける修行者の」この山の峯より彼山の嶺にはしをわたしたらはわつらひもなく人はかよひなんとてそ

のところにおはする一言主と申す神に申けるやう神の神通はほとけにとることなし凡夫のえしせぬ事よういをするをかみのちかひとせりねかはくはこの山のいたゞきよりかのむかひの山のいたゞきまてはしを渡し給へこの願をうけたまはゞ法施を奉らんと申ければそらに聲ありてわれこのことをたへんにしたかひて渡すへし但わかかたちみにくゞて見る人おそりをなさんか夜なくゝわたさんとの給へりねかはくはすみやかにわたしたまへとて心経をよみて祈申に其夜のうちにすこし渡しそめてひるはわたさすねかはくは猶ひるわたし給へと申にひる「わる」わたす事猶あたはしとのたまへは役行者はらたちてしからは護法この神をしはり給へと申す護法たちまちにかつらをもちて神をしはりてさりぬそのかみはおほきなるいはにて見え給ふなれはかつらまつはれてかけふくろなどに物を入たるやうにひまはさまざまなくまつはれていまにおはす也

さはへなすあらふる神もをしなへてけふはなこしのはらへなりけり

この哥は拾遺「抄」の哥也さはへなすといふはあやしき神のはへのことくにあつまりて人のためにたゞりをなすこれをはらひへなこめてなむよはよかるへきといひてみな月のつこもりの日はらへなこむる也このことのおこり日本紀にみえたりあまてる御神のすへみまこを葦原アシのなかつくにの君とせんとイ○する時にその国にさはへなすあしきかみたちあり又くさも木もみなものいふたかむすひのみことやよろつの神たちをつとへたまひてたれかかのなかつくにのあしきものをはらひにつかはすへきみないはくあまほひのみことはこれかみのいさをしなりときためてつかはしてたいらけとゞの

へりといへり

天保九年戊正月元日以一本校合了 岩崎美隆

方
則

◇俊頼髓脳研究会

芦田耕一・海野圭介・北山円正・小林 強・佐藤明浩・田中宗博・中原香苗・福島 尚・安井重雄
鈴木徳男・山本和明

略本系「俊頼髓脳」の研究（一）